③　豆と「鼠の礼返し」

昔々の事でした。或るところにお爺さんとお婆ぁさんがいました。或る日お爺さんは庭を掃いていると、一粒の豆が落ちていたので、これをお婆ぁさんと相談して鼠穴に入れてやり、鼠にご馳走することにしました。ところが、その日の夜の事、お爺さんの所へ大きな一匹の鼠が現れ、「今日お爺さんから戴いた豆のお礼をしたいので、どうか私共の家へ遊びに来て貰いたいけれど、お爺さんのご都合は如何だろうか？」と言うので、お爺さんは「これはこれは、ご丁寧なこと、けれどもあの小さい穴へ何として入って行くもんだべー？」と聞いたら、「それは俺に任せて『良し』と言うまで、唯、目を瞑っていればよいのだ」と言うので、お爺さんは遊びに行ってみることにしました。

お爺さんは暫くの間、鼠の尻尾に摑まって目を瞑っていると、「良し」と言う声がしたので、そぉーと目を開いてみたら、大勢の鼠共が「百になっても二百になっても猫の声聞きたくねぁー、ほーい　ほい」と歌いながら、豆を煎るやら餅を搗くやら「きなこ」を作るやらで、大忙しの歓迎振りでした。お爺さんは美しい着物を着た若い女鼠のお酌で酒を飲み、餅や料理を沢山ご馳走になって、唄や踊りを楽しんだあげく、背負い切れない程のお土産を貰って、お婆ぁさんの待っている家へ、再び鼠に送られて帰って来ました。良いことは進んでやるものだと、大喜びをしていたお爺さんとお婆ぁさんの話を聞きつけた、隣の欲の深い婆ぁさんは「よーし、こうなったら家の『爺っちゃ』にも、毎日、煙草などばかり吹かせていることはねぁー」と、早速家へ帰って爺さんに庭を掃かせてみました。

怠け者の爺さんも漸く拾った一粒の豆を鼠の穴の中へ転がしてやり、鼠が迎えに来るのを待っていました。やがて心の良いお爺さんの時と同じように、鼠のお招きを戴き鼠の家へ遊びに行ってみたら、鼠達は例の「百になっても二百になっても猫の声聞きたくねぁー、ほーい　ほい」の唄を大勢で歌いながら、忙しそうに爺さんの歓迎の準備をしていたところでした。此の爺さんは怠け者のうえ、大変な悪戯好きの人であったので、此の鼠の唄を聞いて「ニャーオ　ニャーオ」と猫の鳴き声の真似をしてしまったから、鼠の家ではさあー大変です。「そら、猫が来たぞー」と叫びながら、慌てた鼠共は明かりを消して何処かへ隠れてしまいました。悪戯爺さんは辺りが真っ暗になり、家に帰るにも帰れず、困ってしまいわぁーわぁー泣きながら、庭の土の中を彼方此方と這いずり回っているうち、爺さんの此の泣き声を聞きつけた婆ぁさんは、爺さんを助け出そうとして納屋から鍬を持ち出し、庭の土を掘ったので、間違って爺さんの額に大きな大きな鍬傷をつけてしまったけどさー。だからあんまり悪戯こぐもでねぁ。これでトッピンパラリのプー。